

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24360255

研究課題名（和文）江戸武家地の空間変容に関する文理統合的研究

研究課題名（英文）The Interdisciplinary Research on the spatial changes of residential area of samurai warriors in Edo

研究代表者

藤川 昌樹（FUJIKAWA, MASAKI）

筑波大学・システム情報系・教授

研究者番号：90228974

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,700,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、都市・江戸の広大な武家地について、武家地全体（主として屋敷地分布）の空間変容と個々の武家屋敷内部の（建築まで含めた）空間変容の実態を解明すると共に、変容を直接・間接に引き起こしたと推定される種々の要因のうち、A武家地政策、B周辺社会、C居住（武士家族及び家臣団）を取り上げて分析を加えたものである。の目的に対しては、「御府内沿革図書」が有する空間情報（街区・敷地）と所持者情報を統合するGISデータ・ベースを作成することとし、そのフォーマットに江戸城南側一帯の武家屋敷の情報を入力した。

研究成果の概要（英文）：This research examined both the spatial change of the whole residential area of samurai warriors and the changes of mansions of warriors in Edo, including the changes of architectural composition, and also analyzed the factors of the changes such as A the urban policies of Tokugawa government, B the surrounding societies of the mansions and C the dwelling styles of warriors. As for the analysis of whole spatial change, this research made the format of GIS database that integrates spatial data and owner data and input the data of warriors' mansions into the format partially. The data set were gathered from the maps of "Gofunai Enkaku Zusho" compiled in the 19th century by the Tokugawa government.

研究分野：建築史・意匠、都市計画、日本史

キーワード：大名屋敷 幕臣屋敷 GIS 御府内沿革図書 屋敷渡預絵図証文 武家地政策 周辺社会 居住

1. 研究開始当初の背景

現在の江戸武家地に関する研究の基礎は、1950-70年代にかけて、平井聖・内藤昌・西川幸治・佐藤巧らの近世住宅史研究者によって形作られた。藤川・森下・岩淵・渋谷及び研究協力者の宮崎は、これらの研究者の研究成果に学びつつ、1980年代後半から1990年代にかけて、当時急速に進展していた近世都市史研究と関心を共有しながら近世の武家地に関する研究を開始し、武家屋敷の空間を、武家儀礼・土地の需給・周辺社会などとの関係から解明する研究を積み重ねて来た。

その一方で本研究チームは、1994年8月よりほぼ月に1度の頻度で「作事記録を読む会」という輪読会を開催してきた。これは萩藩江戸屋敷の作事に関わる記録を解読して読み合わせる輪読会であり、研究開始時点で既に17年余りの活動実績があった。松山・岩本及び研究協力者の金行・高屋・加藤・稲垣はこの会への参加を機に武家地研究に加わった。

こうして江戸武家地に関する研究は1980年代以降進展したが、課題も多く見受けられた。その一つは、江戸武家地全体が如何に変容したかという大局的な理解を志す課題が後回しにされていたことであり、今一つは、個別の武家屋敷研究に関しても、論者個々人の関心や使用史料の残存時期に限定され、武家地の通時的な検討が限られていたことである。

このため、平井聖らが半世紀も前に提出した、明暦の大火を画期とした大きな変容が存在したというテーゼこそ繰り返し確認されているものの、武家地が総体として近世を通じて如何なる理由により如何なる方向に向かって変容したのか、結果として近代以降の東京を如何に規定したのか、については理解の見通しすらついていなかった。

2. 研究の目的

本研究は、武家地空間の変容実態とその論理を解明することにより、江戸の武家地ひいては都市・江戸そのものの都市空間像の再構築を目指そうとするものである。具体的には、近世初期から近代初期にかけての武家地全体（主として屋敷地分布）の空間変容、と個々の武家屋敷内部の（建築まで含めた）空間変容、の実態を解明すると共に、変容を直接・間接に引き起こしたと推定される種々の要因のうち、A 武家地政策、B 周辺社会、C 居住（武士家族及び家臣団）を取り上げることとした。これにより、武家地の空間が如何に変容し、それは如何なる論理に突き動かされていたのかを解明することとした。ただし、本科研費の期間には、江戸の武家地が如何なる方向に変容していったか、またそのために如何なるデータベース（以下、D.B.と略）の作成が必要かに関して、見通しをつけることを直接の目的とした。

3. 研究の方法

目的に掲げた 武家地全体の空間変容につ

いては、「御府内往還其外沿革図書」（以下、「御府内沿革図書」）に示された街区・敷地に関わる空間情報を明治期実測図で補正した図をベースマップとし、これに同史料の所持者情報を属性として持たせる形のD.B.をGIS上に作成することとした。なお、このD.B.は、複数の種類・時点の史料を扱うため、データ入力・統合には様々な困難（位置比定や敷地の統合・分割の記述方法の難しさ等）が予想されたため、研究期間内にこれらの問題の解決に目処をつけ、しかる後に武家地全体に関する通時的なD.B.構築を目的とする次の研究を提案することとした。一方、個々の武家屋敷内部の空間変容の把握は、萩藩・鳥取藩・熊本藩・林大学家を対象に実施し、萩藩については屋敷絵図をCAD図化し詳細な校正を施すことにした。

また、武家地の変容に影響を与えたと推測される要因のうち、A 武家地政策については、幕府が政策を実施するにあたって作成した「屋敷渡預絵図証文」の史料的検討から迫ることとした。B 周辺社会との関係については臼杵藩（藩士江戸日記）・萩藩（屋敷出入鑑札記録・処罰記録）の分析から、C 居住については、大名妻子・幕臣の居住実態の分析から迫ることとした。このほか、「大名屋敷史料を読む会」を東京で月に一度程度開催することとし、江戸の大名屋敷に関する基本的な知見を研究チームで共有することとした。

なお、研究代表者・分担者の6名に加え、研究協力者として宮崎勝美・金行信輔・高屋麻里子・加藤悠希・稲垣智也の5名の協力も仰ぎ、計11名のチームで研究を実施することとした。

4. 研究成果

(1) 各年度の成果概要

平成 24 年度

「大名屋敷史料を読む会」を計 11 回開催すると共に、2012 年 7 月に金沢市立玉川図書館・石川県立図書館・加賀市教育委員会において、2012 年 12 月に山口県文書館において藩政史料調査を行ったほか、江戸武家地の空間情報の D.B. 化のため、フォーマットを確定することと居住者名等のリスト作成に注力し、また、萩藩江戸屋敷絵図 10 点の CAD 図化を完成させた。さらに、打ち合わせ及び成果報告を兼ねた研究会を 2 度（2012 年 7 月於筑波大学及び 2013 年 1 月於京都工芸繊維大学）開催した。

平成 25 年度

「大名屋敷史料を読む会」を計 9 回開催すると共に、2014 年 1 月に山口県文書館において藩政史料調査を行ったほか、「御府内沿革図書」の GIS データ化を進める作業に注力すると共に、空間変容の要因として推定される項目についての個別の分析作業を進めた。さらに、打ち合わせ及び成果報告を兼ねた研究会を 2 度（2013 年 9 月於筑波大学東京キャンパス文京校舎及び 2014 年 1 月於東横イン新山口駅）開催した。2013 年 9 月の研究会では、

高屋麻里子「GIS ソフトによる歴史地図史料利用の試み - 「御府内沿革図書」を用いて - 」をもちに D.B. の内容・構造・作成方法に関して討議を行い、年度後半よりデータ入力を本格化させることとした。2014 年 1 月の研究会では、D.B. 作成の進行状況について確認するとともに、岩本馨が「武家地研究リスト 1965-2013」を紹介する一方、毛利博物館所蔵の萩藩江戸屋敷絵図の調査を行った。

平成 26 年度

「大名屋敷史料を読む会」を計 5 回開催するとともに、前年度に引き続き「御府内沿革図書」のデータ化を進める作業に注力した。また、打合せ及び成果報告を兼ねた研究会を 2 度(2014 年 6 月及び 11 月、於筑波大学東京キャンパス)実施、さらに研究の締めくくりとして、2015 年 1 月 24 日に「江戸武家地の空間変容」と題するシンポジウムを筑波大学東京キャンパスにて開催し、8 本の研究報告を得た(参加者 52 名)。

(2)GIS データ・ベース作成に関わる作業成果

本研究の根幹をなす、武家地全体の空間変容把握のため、下記の作業を実施した。

「御府内沿革図書」「諸向地面取調書」のデジタル化と D.B. 作成

a 『江戸城下変遷絵図集』(原書房、1985 年)掲載の人名と対応絵図一覧データベースを作成するとともに、掲載絵図 1,229 点のデジタル画像化を実施した。

b 「諸向地面取調書」D.B.

『内閣文庫所蔵史料叢刊諸向地面取調書』(汲古書院、1982 年)を基に翻刻しテキストデータ化した(一部分のみ)。

c 「御府内沿革図書」「御府内場末往還其外沿革図書」所蔵・所収現況一覧表を作成した。

d 『御府内沿革図書目録 一〜四』(東京都公文書館、1973 年〜)をテキストデータ化し、原本目録と対照した。

「御府内沿革図書」「御府内場末往還其外沿革図書」の史料調査

D.B. -c に反映させた。東京都公文書館所蔵付図、東京市写、国立公文書館所蔵付図の撮影を行うとともに、国会図書館提供のデジタルアーカイブの画像データをダウンロードにより収集し、現存が知られる付図 42 種類全ての画像データを得た。

「御府内沿革図書」と「五千分一実測図」による復元図作成

a トレース図の作成

-a で作成したデジタル画像をベクトルデータ化するため Adobe Illustrator を用いてトレースし、隣接する範囲を元の絵図の縦横比を維持しながら一定の範囲を接合したトレース図を作成できることを確認した。

b 大名小路周辺から四谷までの江戸城南側一帯について各年代のトレース図を重ね、時系列に基づく変化を図示した。

c 明治期実測図で補正した復元図の作成

『参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図』(日本地図センター、1984 年)で 36

枚に分割された地図をスキャナーでデジタル画像として取込んだ後、Adobe Photoshop を用いて一枚の画像に接合し明治期実測地形図として用い、トレース図の敷地境界を復元した復元地図を作成した。

d 不整合なトレース図と付図の範囲との比較

各絵図の最も新しい年代の絵図を接合したトレース図を作成し、実測図と形状が対応しないことを確認した。また、接合が難しい部分が発生し不整合なトレース図となる部分を確認した。一方で比較的良く接合する部分と付図の範囲が対応することを確認した。

e 付図の作図精度を確認する目的で付図をトレースし明治期実測図と比較

-c 明治期実測地形図に付図のトレースを重ねて縦横比を保持した状態でサイズを調整し、概形がよく対応することを確認した。

復元図とデータベースの GIS 利用

a 復元図を Arc Map(GIS ソフト)を用いて現状地形と対応する状態で敷地概形をポリゴンとして入力した。

b D.B. -a と対応するポリゴンを Arc Map において関連付け、個別の敷地概形のポリゴンと D.B. -a の所持者名が Arc Map 上で対応して表示されるよう入力した。

c トレース図と現状地形の比較

「御府内沿革図書」各絵図と付図の関係および復元図などを比較し、トレース図の不整合部分と現状地形の対応を確認した。地形の高低差の確認には『数値地図 50m メッシュ(標高)日本 II』(国土地理院)を用い、表示ソフトとしてカシミール 3D を用いた。

(3)シンポジウムでの成果発表

2015 年 1 月 24 日に開催したシンポジウムは、本研究の締めくくりとなるものである。研究目的との関係を示しつつ各報告の要旨を記し、本研究で得られた個別の知見についてまとめた。

高屋麻里子「御府内往還其外沿革図書」のデジタル化と GIS 利用の試み」は、19 世紀に江戸の屋敷地の変遷を考証したとされる「御府内沿革図書」を対象としてデジタル化と GIS 利用を試みた、本研究目的に直接関わる研究成果の報告である。同史料は年代毎の敷地と所持者名が記される絵図と、広範囲の付図から構成される。大名小路周辺について絵図の縦横比を保持して接合しトレース図を作成したところ、一定の範囲における複数の年代の敷地変遷を捉えることができることを実証した。また付図は明治期実測図と非常によく対応し製作技術の精度が高いことを確認した。掲載範囲全ての絵図の最終年代の図を接合しトレース図を作成したところ、付図と対応する範囲がよく接合することも確認した。個別の絵図は不正確ではあるが、高精度な付図に基づいて作成されていることが推測できるため、19 世紀段階での江戸の地形に関する情報を十分に含むと考えられる。トレース図と明治期の実測図を対比して敷地の復元図を作成し、GIS ソフトで敷地のポリゴンと所持者名を統合する D.B. を作成し現状地形と比較したと

ころ、トレース図に現れる絵図の「歪み」は19世紀段階での複雑な地形の反映であることが推測できるとした。近世絵図史料のデジタル化とGIS利用からは、従来の手法では十分に読み取ることが難しかった情報を可視化する成果が得られると主張した。

藤川昌樹「大名小路の変容と武家屋敷の構成」は、目的に対応するものであり、近世を通じて最も変化の激しい地区の一つであった大名小路を取り上げ、その全体の変容の状況と個別の武家屋敷の構成の変容について検討を加えたものである。江戸時代初期には、2列の武家屋敷と河岸沿いの町屋からなる3列の屋敷から街区が構成されるケースが多かったが、17世紀半ば頃までには町屋は消失して武家屋敷に併合され、最終的には1列もしくは2列の屋敷により各街区が構成されるようになったこと、中には一つの街区を一つの屋敷が占めるようなケースも現れたことをまず指摘した。また、街区は、田舎間40・60・100・48・72間などのモジュールをもとに設計された可能性が高いとした。次いで、鳥取藩池田家、熊本藩細川家、儒者林大学頭家の各屋敷を取り上げ、これらの屋敷地が江戸時代を通じていかに変容したか、また各屋敷内の空間は敷地の変化にいかに対応していたかについて検討を加えた。この結果、各屋敷絵図の寸法からみても田舎間40・60・100間などのモジュールは確認可能であり、当初は60間四方の規模の屋敷が多く奥向きが不完全であるなどの敷地規模に起因する問題を抱えていたが、敷地の大規模化の中で解消され、一方で敷地中央部付近に池泉付庭園が普及して行ったとした。

岩本馨「「屋敷渡預絵図証文」について」は、要因分析のうちA武家地政策に関わるものであり、江戸における武家屋敷移動を知るうえでの基本史料である「屋敷渡預絵図証文」の基礎的な検討結果を報告したものである。ここではまず、国立国会図書館旧幕引継書における原証文と写本の現存状況について月単位での整理を行ったうえで、屋敷渡証文・屋敷預証文・屋敷差戻証文のそれぞれの類型について文言を詳細に検討し、得られる情報（絵図・屋敷拝領者名・前拝領者名・坪数・隣接地拝領者名・建家建具などの引継・普請方立合役人名・大工名など）の詳細を明らかにした。また絵図証文の目録である「屋敷書抜」についても併せて検討を行い、「絵図証文」の原本・写本および「屋敷書抜」諸本の相互の関係と系譜について明らかにした。さらに同報告では、貞享元年から享保10年までの屋敷収受のデータをもとに、「御府内沿革図書」の差分が反映されているかどうかの検討も行った。この結果、当該期の差分1,073のうち76%が「絵図証文」ないし「屋敷書抜」において確認されたとした。ここに見られない屋敷流動としては、役屋敷などの証文作成対象外の屋敷収受、相対替、証文散逸などの可能性が考えられるが、この点を明

らかにすることは今後の課題であるとした。

岩淵令治「江戸勤番武士と地域」は、要因分析Bの周辺社会との関係を探ったもので、臼杵藩の中級藩士国枝藤右馬の天保13～14年(1842～43)の日記から、参勤交代で江戸に滞在した勤番武士の生活圏を検討した。まず、外出全体の特徴を検討した。判読可能な414日のうち外出日は154日(37%)に過ぎず、うち103日の行き先は上屋敷より2km以内の地域であった。外出は週に2・3日、うち遠出は1日程度であり、また遠出で5回以上の訪問先は9箇所にすぎない。外出制限の結果、勤番武士の行動の中心は藩邸より2km以内となったのである。次に、国枝のメンタルマップと合わせて行動を検討し、国枝がこの範囲において衛生関係（湯屋、髪結）、安価な品や生活用品～高級品の買い物（自身の衣服、刀・刀装具、土産）、外食、芸能鑑賞（寄席、相撲、芝居、浄瑠璃）、文化的交流（服部、秋輝、荒木）を充足できていたことを確認した。また、相手の町人たちについて、藩の出入との重複、同僚や他藩の藩士との相手の重複、臼杵藩の勤番武士が国元から持ち込んだ木綿の委託販売依頼などを明らかにした。そして、従来、勤番武士については、余暇をもてあまし江戸中を逍遙したイメージと、江戸に無知な田舎者というイメージが強調されてきたが、彼らの消費が核となって構成される地域を分析することが、江戸の社会を検討する上で重要であることを提言した。

森下徹「萩藩江戸屋敷と町人社会」も要因分析Bに関わるものであり、萩藩江戸屋敷に即して、江戸の町人社会と結び結ぶ関係を検討した。この主題についてはすでに加賀藩を素材にした吉田伸之の議論があり、御殿空間・詰人空間という空間構造に対応して、出入り関係が結び結ばれたと想定している。萩藩には屋敷出入りの鑑札交付者をまとめた記録があり、御殿空間・詰人空間双方の出入り町人を把握することができる。また奉公人が外出後、所定の時間に戻らなかったさいの処罰記録からは、役所や主人（家臣）と江戸町人との関係や、奉公人自身の江戸社会との接点をうかがうこともできる。これらを通してみると、桜田屋敷ならば山下門外の町々、麻布屋敷ならば門前の龍土町など、屋敷の比較的近辺に出入り町人が存在していたことがわかる。とくに龍土町は「門前町」とも呼ばれており、町として麻布屋敷の日常を支える機能を果たしていたらしい。さらにこれら藩や家臣との出入り関係とは別に、奉公人が江戸市中の諸所に「知人」や滞在先を有していたことも注目される。このように、吉田が明らかにした以上に、複雑で重層的な関係が形成されていたと考えられるとした。

金行信輔「寛永期における大名家の下屋敷拝領について：正室の江戸居住と武家地の拡大」は、要因分析C居住に関わるものであり、江戸時代初期における大名正室の国元から江戸への居所移動に注目し、屋敷地の新規取

得（拝領）複数化などについて検討した。従来から、大名家の江戸屋敷は参勤交代制と妻子の江戸居住制の確立にともない成立した、と通説的に説明されている。しかし、本報告のように後者の確立過程と江戸屋敷の関係について、具体的に論じた研究は行われていなかった。はじめに、大名（当主・嫡子）の正室が慶長期から寛永期にかけて分散的に江戸居住を開始したことを指摘し、とくに外様国持大名の場合、それが元和末年前後に比較的集中していることから、彼らの寛永期における江戸外縁部の屋敷地（下屋敷）拝領の背景となったとする仮説を示した。ついで、具体例として土佐山内家を取り上げ、当主忠義の正室と2人の子が元和9年に江戸移住し、従来の屋敷（鍛冶橋邸）の居住スペースが足りなくなったこと、そのため新たな屋敷地の取得を目指し、寛永4年に中屋敷（鍛冶橋邸に隣接）同5年に外縁部の下屋敷（芝邸）を拝領したことを明らかにした。また、拝領屋敷下賜が一段落する寛永末年までには、各大名家の家族の居住に必要な屋敷地が確保されたと推定した。

渋谷葉子「江戸における武家地の実態：幕臣屋敷を中心に」も要因分析C居住に関わるもので、元来江戸は徳川氏の居城江戸城の城下町であり、同氏に仕える旗本・御家人の集住地として設定されたという本質に注目し、徳川氏の旗本・御家人＝幕臣の屋敷と居住のあり方の実態を解明すべく、巣鴨・愛宕下地域の一部を素材として幕臣屋敷の変遷と利用を整理・分析したものである。まず巣鴨の分析から江戸城に勤仕する幕臣の居住範囲は自ずと限定されたもようであり、江戸城大手門から5km超の巣鴨に住む者は至極稀で、多くが2～3kmの間に何らかの形で住居を求め、それは4kmを限界としたことが判明した。次に愛宕下の分析から、同地は江戸城大手門より約2kmに位置するが、地区により居住者層が差異し、高禄者の居住地区では他者へ屋敷地を貸与する者がなかったとした。したがって武家地の他者への貸地や長屋貸与の有無はところによったことが想定され、幕臣の居住地域・地区には偏りがあるとした。さらに研究史上、自らの拝領屋敷に居住しない幕臣の多さが指摘され、その理由は主に困窮による売却のためとされたが、上記の状況から拝領屋敷に住まない選択をした者が少なからずあった可能性を見出した。

松山恵「明治初年東京の「郭外」武家地の変容について」は、江戸の武家地が明治期以降、どのような論理のもと、民間への払い下げなどの処分がおこなわれていったのかを検討したものである。明治維新にともなう江戸武家地の処分過程については、すでに報告者（松山）の研究などからその全般的傾向は明らかになっている。すなわち、明治初年における事実上の東京遷都によって都市域の過半を占めていた武家地が新政府用地などへと転用されたことは一般に知られるが、

しかし実際のところ、そうした官用に供されたのはもっぱら中心部（「郭内」）に位置するもののみだったのであり、周辺部（「郭外」）の処分過程についてはほとんど未解明のままであった。この点について、本報告では「白山地域の幕臣屋敷」と「三田の大名藩邸地域」のふたつのエリアを素材に、明治初年の払い下げの過程、また払い下げを受けた人物（地主）の性格などを、東京都公文書館に所蔵される東京府関係文書の検討から明らかにした。その結果、周辺部の武家地では、明治初年（2～4年）のいわゆる桑茶令の影響、および、当該期に東京府行政の中心的担い手となった薩摩藩関係者との縁故が、その処分の過程で非常に大きな影響をおよぼしていたことをはじめて指摘した。

(4) 研究のまとめ

江戸武家地の空間変容全体をGISを用いてD.B.化して解明しようとする作業は、現在その半ばまで到達したにすぎない。しかし、「御府内沿革図書」を主史料として作成中のD.B.は「近世の空間」と「近世の所持者」の情報を直接結びつけるのに極めて有効であるように思われる。最終年度には、このGISデータの完成を期して、翌年度以降の科研費申請を行ったところであり、今後も継続して作業を行いたいと考えている。

一方、個別の武家屋敷の空間変容やそれらを引き起こした要因についても、新たな知見を種々得ることができた。とはいえ、現時点ではそれら相互に有機的な関係を見出すには至っていない。引き続き研究を継続したいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計12件）

森下 徹「城下町萩の武家奉公人」『思想』1084号、pp.82～94、2014、査読無。

岩淵令治「江戸城門番役の機能と情報管理」、『国立歴史民俗博物館研究報告』、第183集、pp.263-304、2014、査読無。

渋谷葉子「大名江戸屋敷の機能的秩序 - 尾張藩を素材として - 」、『研究紀要』、第48号、徳川林政史研究所、pp.81-100、2014、査読無。

岩淵令治「江戸の消防体制と火事場見廻り」、『紀要別冊 近世社会史論叢』、東京大学日本史学研究室、pp.23-42、2013、査読無。

渋谷葉子「「登城道筋之図」と尾張藩市谷屋敷 その抹消された痕跡を読む」、『研究紀要』47、徳川林政史研究所、pp.1-2、pp.99-110、2013、査読無。

岩淵令治「境界としての江戸城大手三門門番の職務と実態」、『研究紀要』22、東京大学史料編纂所、pp.249-266、2012、査読無。

松山恵「東京市区改正事業の実像 土地建物の価値をめぐる転回とその波紋」、『史潮』、新72号、pp.67～86、2012、査読有。

〔学会発表〕(計7件)

高屋麻里子・山縣杏香・藤川昌樹「江戸図復元地図にみる武家地の変遷過程 江戸城下武家地変遷の研究その1」、日本建築学会大会、神戸大学(兵庫)、2014.9.14.

山縣杏香・高屋麻里子・藤川昌樹「大名小路の屋敷地の変容 江戸城下武家地変遷の研究その2」、日本建築学会大会、神戸大学(兵庫)、2014.9.14

岩淵令治「鳥取藩と江戸」、公開研究会「県民と学ぶ最新の鳥取藩研究」、鳥取県立博物館シンポジウム、鳥取県立博物館(鳥取)、2014.3.30

岩本 馨「駿府の近世」、駿府城再建市民の会主催、静岡市江崎ホール(静岡)、2014.3.14.

岩淵令治「Relationship between the Samurai and Urban Society in Castle Towns in Japan」、CNRS・日仏二国間交流事業セミナー(Espaces, statuts et institutions: perspectives franco-japonaises en histoire urbaine)、Université Paris IV Sorbonne(France)、2013.11.22-23.

岩淵令治「文献資料からみた大名家の葬送儀礼の成立 鳥取藩池田家を素材に」、大名墓研究会(近世大名墓の成立 考古学と文献史学から)、日比谷図書文化会館コンベンションホール(東京)、2013.10.20.

高屋麻里子・藤川昌樹「萩藩江戸上屋敷の井戸と給排水設備の整備」、日本建築学会大会、北海道大学(北海道)、2013.8.30.

〔図書〕(計8件)

森下 徹『近世都市の労働社会』吉川弘文館、総326頁、2014.

国立歴史民俗博物館+岩淵令治編『「江戸」の発見と商品化 - 大正期における三越の流行創出と消費文化 - 』、共編著、岩田書院、総139頁、2014.

渋谷葉子「愛宕下における武家地の諸相 - 芝口・愛宕下・西久保 - 」、『愛宕下遺跡III - 本文編・資料編』第一分冊、東京都埋蔵文化財センター(共著)、327-419頁、2014.

渋谷葉子「江戸時代の若松町遺跡 文献・絵図史料にみる土地利用」、共和開発株式会社編・発行『新宿区若松町遺跡』、東京都赤十字血液センター(共著)、205-216頁、2014.

作事記録研究会編(藤川昌樹、森下徹、岩淵令治、渋谷葉子ほか4名)『大名江戸屋敷の建設と近世社会』、中央公論美術出版、総371頁、2013.

作事記録研究会編(藤川昌樹、森下徹、岩淵令治、渋谷葉子ほか4名)『萩藩江戸屋敷作事記録』、中央公論美術出版、総568頁、2013.

杉森哲也・岩淵令治ほか『日本近世史』、放送大学教育振興会、総281頁、2013.

藤川昌樹編『江戸大名屋敷作事記録を読む』、東京大学藤井研究室、総114頁、2012.

(1)研究代表者

藤川 昌樹(FUJIKAWA, MASAKI)
筑波大学・システム情報系・教授
研究者番号:90228974

(2)研究分担者

森下 徹(MORISHITA, TORU)
山口大学・教育学部・教授
研究者番号:90263748

岩淵 令治(IWABUCHI, REIJI)
学習院女子大学・国際文化交流学部・教授
研究者番号:90300681

渋谷 葉子(SHIBUYA, YOKO)
公益財団法人徳川黎明会・徳川林政史研究所・非常勤研究員
研究者番号:70462257

岩本 馨(IWAMOTO, KAORU)
京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・講師
研究者番号:00432419

松山 恵(MATSUYAMA, MEGUMI)
明治大学・文学部・講師
研究者番号:40401137
(2012年4月1日~2013年8月31日)

(3)研究協力者

宮崎 勝美(MIYAZAKI, KATSUMI)
前東京大学・史料編纂所・教授

金行 信輔(KANEYUKI, SHINSUKE)
前千葉大学・工学部・准教授

高屋 麻里子(TAKAYA, MARIKO)
筑波大学・システム情報系・研究員

加藤 悠希(KATO, YUKI)
竹中大工道具館・研究員

稲垣 智也(INAGAKI, TOMOYA)
文化庁・文部科学技官